岡山ＥＳＤ推進協議会参加組織の取組状況に係るアンケート結果の概要

１．調査方法

岡山ＥＳＤ推進協議会の委員会及び運営委員会の構成組織、プロジェクト参加団体の計８１団体にアンケート調査（別添資料Ａ）を依頼した。

また、別途、各地域のユネスコスクール校と連携してＥＳＤに取り組んでいる公民館１５館を対象に依頼したアンケート調査（別添資料Ｂ）の結果の一部についても、本報告で紹介する。

２．調査結果

アンケートの結果、協議会委員会構成組織からは１８組織中１０組織、協議会運営委員会１６組織中８組織、プロジェクト参加組織３０組織中１４組織、岡山ＥＳＤプロジェクト推進事業所管関係課１７組織中１３組織から回答を得た。（全体の回答率５５％）

（１）プロジェクトへの各組織の参加状況

「岡山ＥＳＤプロジェクト 2015-2019」に規定された「具体的な取組」（資料１）への各組織の参加状況は、「該当するものがある」８９％の他、、「該当するものはないが目指すべき地域の姿の趣旨に沿った活動を行っている」や「独自に ESD を行っている」を含めると、１組織を除きＥＳＤに取り組んでいた。

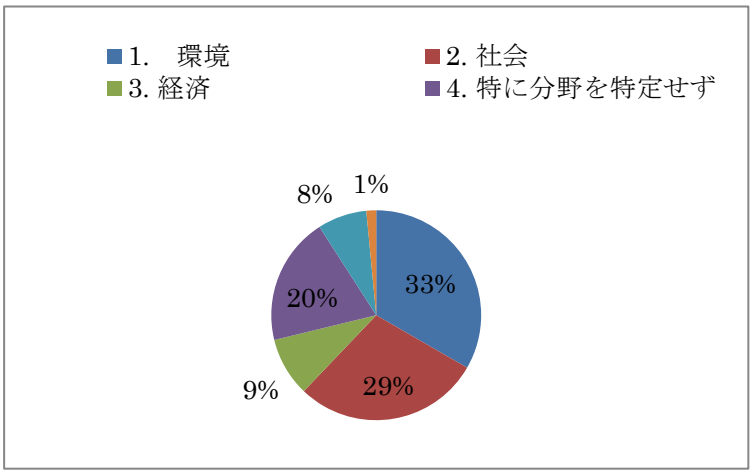
一方、各組織が取り組んでいる事業・活動については、「参加型の学びやイベント等を実施する」（６９％）の他には、全体に分散する傾向が見られた。

その中で比較的多かった項目としては、「ESD 情報に接する機会を増やす」29%、「持続可能な社会づくりへの思いや知恵の継承」27%、「若い世代のＥＳＤ実践者を増やす」24%等で、他の項目はいずれも 20%以下であった。

（２）活動分野

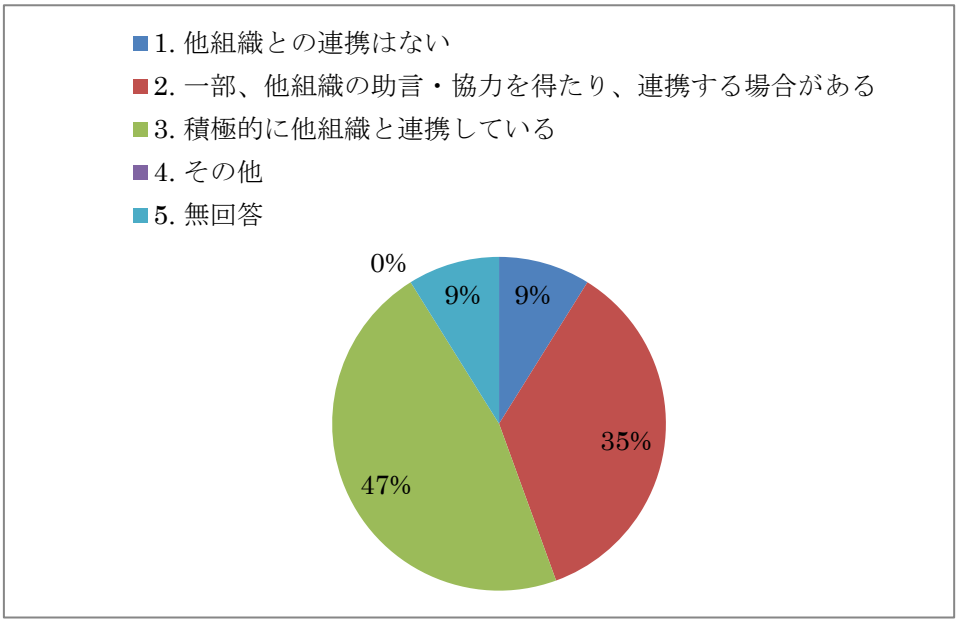
各組織の活動分野については、以下のとおりであった。

多くの教育機関の多くでは、組織の性格上、今回の調査では、「特に分野を特定しない」と回答していることが考えられるが、一方で、各地域や組織の特性等から重点的に取り組んでいる分野があることが考えられることから、今後、場合によっては、このような視点からの精査が必要と考えられる。



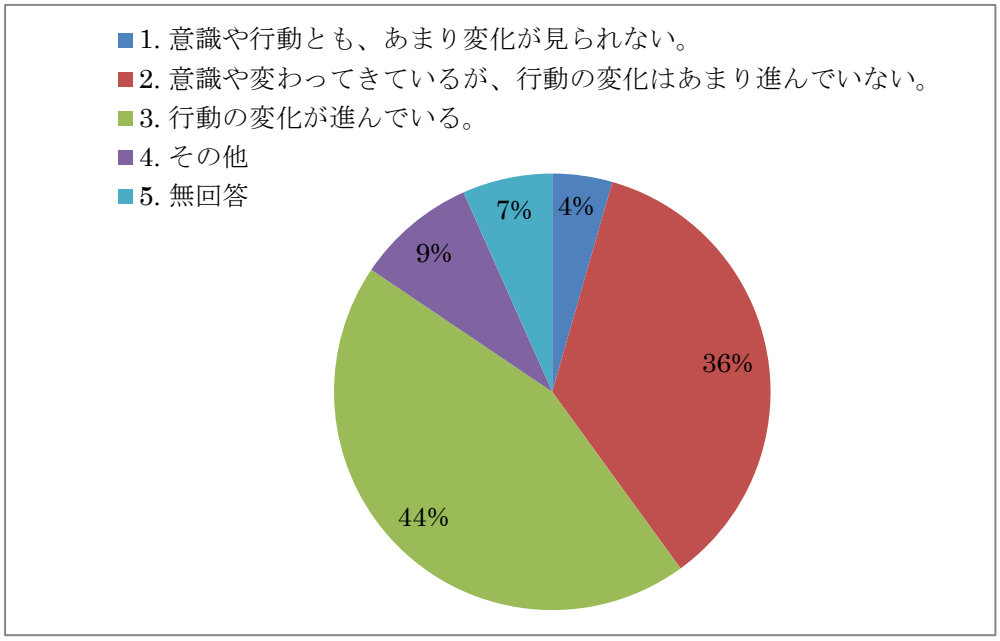
（３）連携

各組織の他組織との連携状況については以下のとおりで、「積極的に連携している」と「一部連携している」を合わせると、回答組織の約８割で他組織との連携活動が行われており、2005 年以来、「地域全体での取組」を目指してきた本プロジェクトの成果の一つと考えられるが、一方で「積極的に連携」についてはほぼ半数であり、今後、一層各組織間の連携を促進していくためには、新たな枠組みづくりが必要となることも考えられる。



（４）組織の変容

ＥＳＤの取組を通じて、各組織自身の関係者の持続可能な社会づくりに関する意識や行動の変容に関して、「行動の変化が進んでいる」との回答が４４％と最も多く、「意識が変わっているが、行動の変化はあまり進んでいない」を合わせると、全体の約８割で変化が進んできていることが伺われる。



一方で、この度の調査対象が比較的規模の小さい組織が多いが、一部大規模組織（組織の構成員が概ね 100 人以上または学習対象者が概ね 1,000 人以上）では、以下のとおり認識に違いがみられた。この度の調査ではサンプル数が少なく、さらなる精査が必要と考えられるが、今後留意する必要がある。

表１．ＥＳＤの取組による組織関係者の変容についての規模による違い

項目	全体	大規模	小規模
意識や行動とも、あまり変化が見られない	４	１１	３
意識は変わっているが、行動の変化はあまり進んでいない	３６	２２	４２
組織内全体で行動の変化が進んでいる	４４	２２	４７

（単位：%）

また、本アンケート調査とは別に、地域のユネスコスクール活動の支援に、住民と連携して取り組んでいる公民館について、同様の趣旨のアンケート調査を行ったところ、以下のとおり全ての公民館で職員の変容が見られている。

公民館は、表 1 の小規模に分類される組織であり、本アンケート結果と同じ傾向であると言えるが、加えて全ての公民館の活動の柱の一つとしてＥＳＤに取り組んできており、その成果が表れている結果と考えられる。

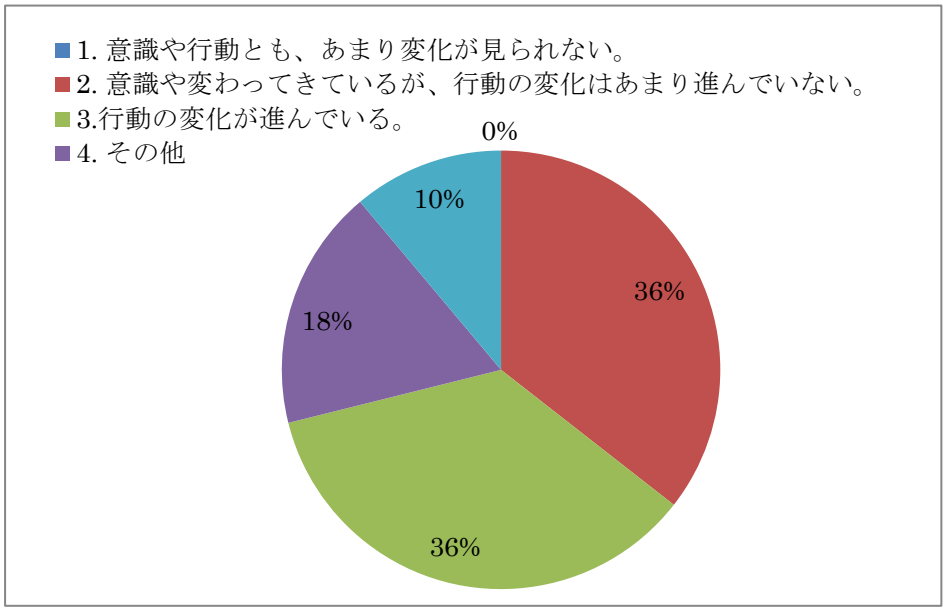
表２．公民館のＥＳＤ活動による職員の変容

項目	割合(%)
公民館の事業を ESD の視点を活かして企画・実施できるようになった	８７
地域との関係が深まり、信頼関係が強くなった。	６７
職員が ESD の意味を理解し、公民館で取り組むことの意義を理解できた。	５３
持続可能な社会づくりに関する複数の課題を繋いで、事業を扱うようになった。	５３
コーディネーターとしての役割を自覚し、学校や地域の諸団体をつなぐことを自らの仕事だと認識するようになった。	５３
コーディネーターとしての役割を自覚し、学校や地域の諸団体をつなぐことを積極的に行うようになった。	４７
ワークショップの実施や 、体験を通した学びの場づくりなど、学習の手法が今までより多様になった。	３３
同僚との協力、協働関係が強くなった。	３３
今までより広い領域にわたって取り組むことができるようになった。	２７
職員自身の成長、実践力の強化に繋がった。	２０
持続可能な地域づくりへ公民館として貢献する道筋が見えてきた。	２０
変化が感じられなかった。	０

（対象：15 館）

（５）学習対象者の変容

各組織のＥＳＤの取組を通じて、学習対象者の持続可能な社会づくりに関する意識や行動の変容に関して、「行動の変化が進んでいる」と「意識が変わっているが、行動の変化はあまり進んでいない」が同じ割合で最も多く、全体の約７割以上で変化が進んできていることが伺われる。



また、組織の規模による比較では、以下のとおり「意識は変わっているが、行動の変化はあまり進んでいない」は同程度であったが、「組織内全体で行動の変化が進んでいる」については、認識に違いがみられた。（サンプル数が少ないことによる留意事項は、上記（４）と同様である。）

ただ、「意識や行動ともあまり変わっていない」については、組織規模に関わりなく回答数が０であり、持続可能な地域づくりに対する意識や行動の変容が、徐々に地域全体に広がっていることが伺われる。

表３．ＥＳＤの取組による組織関係者の変容についての規模による違い

項目	全体	大規模	小規模
意識や行動とも、あまり変化が見られない	０	０	０
意識は変わっているが、行動の変化はあまり進んでいない	３６	３３	３６
組織内全体で行動の変化が進んでいる	３６	１１	４２

（単位：％）

一方、公民館のＥＳＤ活動による住民の変容に関するアンケート結果は、以下のとおりで、最も高かった「地域に対する愛着心が高まった」（７４％）等の意識面のみならず、「地域の持続性を高めるために何ができるか考え、行動する住民が増えた」（３３％）等の行動面での変容が進んできていることが伺われる。

また、このことが本アンケート結果と同じ傾向であることや、公民館でのＥＳＤ活動成果が表れている結果であることについては、前述の「（４）組織の変容」と同様である。

表４．公民館の ESD 活動による住民の変容

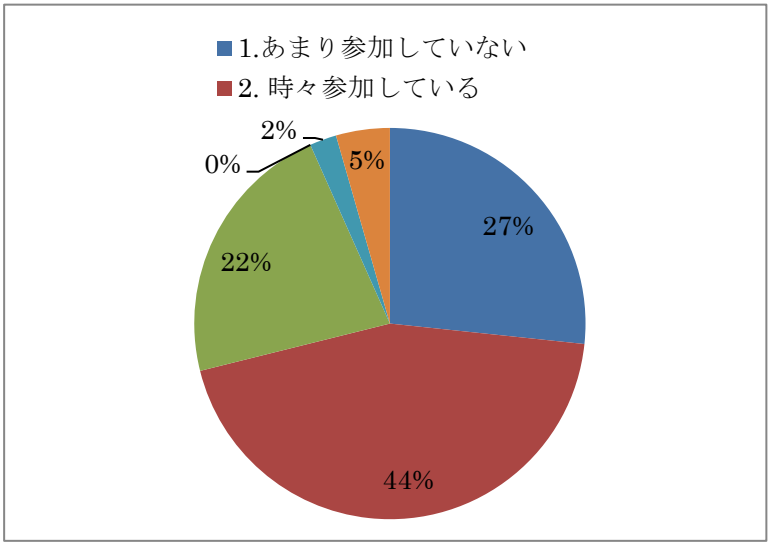
項目	割合(%)
地域に対する愛着心が高まった	73
地域に貢献したいという気持ちを持ち、行動する住民が増えた	53
地域の人同士の繋がりや信頼関係が豊かになった	40
地域の持続可能性を高めるために何ができるか考え、行動する住民が増えた	33
ESD 活動を通して育んだ価値観のもとに、他の人に伝えたり、人や活動をつなぐ役割を果たす人が出てきた	33
異なる住民組織間の連携や協働が進むようになった	27
住民のコミュニケーション能力が向上し、他の人に伝えたり、人や活動をつなぐ役割を果たす人がでてきた	20
地域住民組織の活動が、地域や社会の持続可能性を意識したものに変わった	20
自尊感情を高めた住民が増えた	13
異なる文化や価値観を持つ人とも対話交流しようとする機運が高まった	13
持続可能な社会づくりの考え方を身に付け、変容を遂げた住民が増えた	7
積極的に学校教育に関わる住民が増えた	7

（対象：15 館）

（６）協議会活動への参加

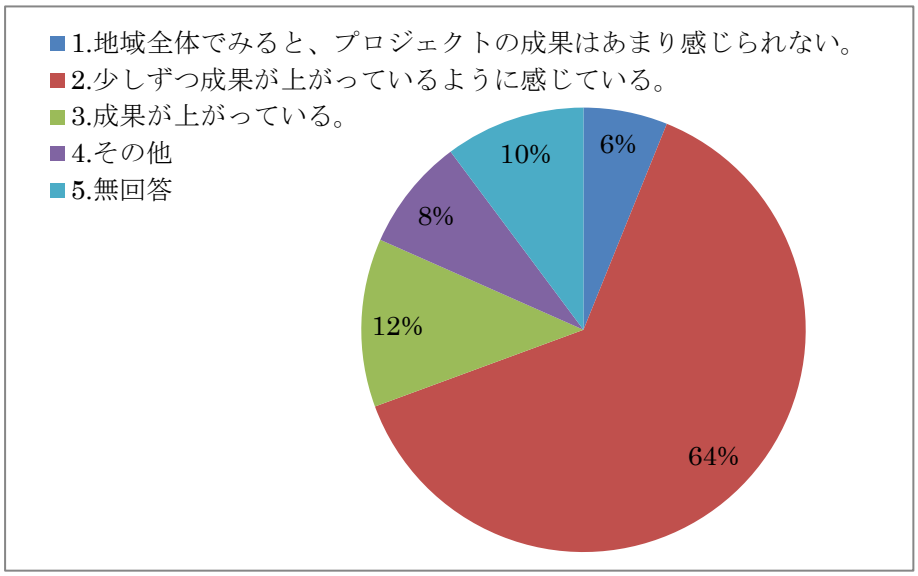
岡山ＥＳＤ推進協議会が主催、共催している啓発イベントや関連会議、交流会、研修会への参加状況については、「時々参加している」（４４％）が最も多いが、一方で、「あまり参加していない」（２７％）が「積極的に参加している」（２２％）を上回っているなど、課題がある状況であった。

今後、必要に応じて、協議会自体の事業の内容や運営方法、広報活動等のあり方についての見直しの検討が必要と考えられる。



（７）岡山ＥＳＤプロジェクトの成果に関する認識

持続可能な地域づくりに関する地域全体の意識や行動の変革を目指す岡山ＥＳＤプロジェクトの成果についての各組織の認識は以下のとおりで、「少しずつ成果が上がっている」と「成果が上がっている」の合計が全体の８割程度となる等、一定の評価をしていることが伺われる。



（８）各組織の活動とＳＤＧｓとの関連

各組織の活動とＳＤＧｓの目標との関連の認識について、「最も関連している」と「それ以外で関連している」の回答数の合計でみると、ＥＳＤと係わりが深い目標４、11、の他、地域生活との関わりが深い目標３、17 が多く、逆に少なかったのは目標９、14、１等であった。

一方、上述した現在各組織が関わりが深いと認識している目標以外にも、それぞれの組織の活動を見つめ直すことにより、ＳＤＧｓとの関わりが深い目標も多いと考えられることから、今後、各組織に対して、ＥＳＤ活動等を通じてこれらの分野についての理解を深めていくことが、地域全体のＳＤＧｓを推進していくうえで必要と考えられる。

表５．各組織が関連あると認識しているＳＤＧｓ項目

	1	2	3	4	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
最も関連している	1	3	2	11	1	1	3	0	1	9	5	2	0	6	2	3
上記以外	3	3	8	8	7	6	4	1	6	5	3	5	2	3	3	7
合計	4	6	10	19	8	7	7	1	7	14	8	7	2	9	5	10

（数字は回答数）

（９）その他

以下に、この度のアンケートにおいて、各組織からの具体的な記述内容の一部を紹介する。（全ての回答は別紙参照）

（ＥＳＤ活動による組織の変容）

活動の広がり	活動の深まり
生命科学コースによる「環境」、グローバル教育に係る「国際交流：からユネスコスクールとして ESD 活動に取り組む際に、従来から行われていた「人権」「平和」「ボランティア活動」などを含む教育活動が ESD を意識したものとなり、学校全体としての取組に広がっている。	SDGs の項目についても教育活動との関連を考えるような方向で取り組みを進めている。
多くの方と連携を取ることができている	連携した方と一緒に活動を行うことができている。イベント実施、企画展示の開催など
「食」をメインテーマとしての展開が農業、安全、食品ロス…となっている	食品ロスに関して、啓発活動から開始し、1つ解決策として無料マーケットの展開へとシフト
積極的に地域等と連携した学習を進めることができるようになってきている	総合的な学習の時間の計画等を見直し、児童生徒が主体的に取り組むことができるよう工夫して実践を進めることができている
本団体は学校がベースにあるが、その枠を超えて地域連携、一般の方々との連携が進んでいる。今後もこの広がりを大切にしたい。	里山づくりからスタートした活動は 9 年目を迎えているが、環境教育、防災活動へと広がりをみせ、それぞれの分野で深まりを見せている。
会員の思いを実現できるよう努力するようになった	地域に地域の再発見再認識を呼びかけ、地域の宝物として感じてもらえるようになった。

（ＥＳＤ活動による学習者の変容）

活動の広がり
生命科学コースによる「環境」、グローバル教育に係る「国際交流：からユネスコスクールとして ESD 活動に取り組む際に、従来から行われていた「人権」「平和」「ボランティア活動」などを含む教育活動が ESD を意識したものとなり、学校全体としての取組に広がっている。
・環境学習是前講座や環境学習エコツアーの参加後の児童・生徒の省エネ活動の活性化 ・環境教育ミーティングを通して生まれた共同企画の事業化など
学校などへ出向いて実施している環境学習を通じて「知ることができた」「取り組んでみたいと思った」などと意識や行動の変化がみられる。
ユネスコスクールの児童生徒の多くは ESD に係る取組に満足することができている。特に、学区の地域に対する愛着を抱くようになった児童生徒が多くみられた。
数年連続で農園クラブに参加するリピーターの家族があり、初めて参加する家族にとって「よき手本」となっている。その結果、クラブで集まる日以外にも、畑に足を運ぶ家族が増えており、参加者全体の意識の高まりを見ることができる。
継続的に ESD フェスティバルに足を運んでいただけるようになり、複合的に ESD への理解が深まってきている。
国内でできる国際協力活動に取り組みを行う学校や個人が増えている。リサイクル品や書き損じはがきなどを集めたり、フェアトレード商品を販売し、その収益を国際協力に活用するなど
毎週土曜日に科学館で研究活動を実施しているが、学習する小中学生および指導役の大学生共に、自分で考えて行動できるようになっている。
事業への申込者数が増加しており、市民の関心が高まっている。

また、学習者の行動の変容については、以下のとおり追跡調査を行っていないため、把握できないという回答が複数あった。

イベントを提供しているが、その効果を評価することは難しい。これは教育効果を評価することのむずかしさと同じである。追跡調査をすれば効果を評価することはできるであろうが、そこまでの余裕はない。
対象者とは継続してかかわりがあるわけではないので、その後の変化がわかりにくい。
ふりかえりを目的として集うことがなく、実生活に反映されているかどうかの把握ができない
研修後のアンケートでは ESD の視点は特別ではないという内容の者も多く、意識は変容しているのがわかったが、行動に関しては確認できていない。